

○紅花屏風 横山華山

紙本著色 屏風 六曲一双

各一五四・三×三五七・〇

江戸時代 右隻文政六年(一八二三)

左隻文政八年(一八二五)

横山華山(一七八四—一八三七)は、名を一章、字は舜朗または舜明。京都に生まれ、初めは岸駒について絵を学んだが、のち松村呉春を慕い四条派に転じて一家をなす。人物、花鳥画に秀でていた。

本屏風は、京都の紅花問屋・伊勢屋理右衛門の依頼により華山が描いたもの。

京都画家らしい華やかで洗練された色調と対象を的確に捉える柔らかみのある線描が素晴らしい。邸の前でけんかする男たち、仕事のあい間に乳を含ませる女、座敷で談笑する商人らの表情が生き生きと描かれている。写生を重んじる四条派の面目躍如たる力作である。屏風面に散らされた金砂子がきらびやかに輝き、紅花の色をひときわ引き立たせている。

華山は紅花の産地を歩いて、種播き、開花、摘花から紅花餅の製造、輸送などを見聞したとされるが、これらの調査と写生にかなりの期間を要したのだろう。屏風左右の制作年のずれが、そのことを証している。右隻の右下隅には「文政六癸未之秋」、左隻の左下隅には「乙酉秋」の年紀があり、それぞれ文政六年(一八二三)と文政八年(一八二五)にあたり、ちょうど二年間の開きがある。描かれている場所も、右隻が関東武州地方(埼玉県)、左隻が奥州大河原(宮城県)と考えられている。その根拠として、産地による花餅の大きさの違いがあげられる。「最上の紅餅は大きさ錢の如し、西国の紅餅は円形にして三、四寸許り」と古い記述にある通り、右隻の花餅は大きく板に並べて運ばれ、左隻のは小さくむしろに並べて乾燥させている。これは気候による製法の違いであり、暖い関東では西国と同じ大型の餅であった。

京都の祇園祭は、各問屋の店頭で屏風が飾られ別名屏風祭ともいわれていたが、伊勢屋の『紅花屏風』は京の人々の評判を呼んだという。明治四年、山形の豪商佐藤家に譲られ、のち長谷川家に移った。紅花の特産地山形にふさわしい文化財である。落款は両隻とも「華山写」、白文連印「華」「山」が捺されている。